

週刊朝日

11|17
2006
320円

ワイドショーが
放送できない!
中村獅童家の
「秘密」

妊娠・出産 壮絶な現実
「14歳の母」対談

スクープ第2弾!!
金正日の精神分析

元東京特派員が書いた「プリンセス・マサコ」の衝撃

雅子さま、皇太子さまは
皇籍離脱まで考えていた

独自調査
東大合格者
出身校
「必修漏れ」
一挙公開

村上春樹が書いていた
憲法とノーベル賞



1993年6月9日、皇太子ご夫妻は結婚された



今年1月2日の
新年一般参賀で

『プリンセス・マサコ』
は来年、講談社から出版される予定

雅子さまの関係者60人以上に取材して執筆したという『プリンセス・マサコ』が1日、オーストラリアで出版され、ネット上で話題になり始めている。豊かな才能に恵まれた雅子さまが不憫な状況にあることなどが、著者の執筆動機だという。だが、その内容は、雅子さまを取り巻く状況からご病気まで、あまりにも衝撃的なものだった。

本の副題は「菊の御紋の因われ人 日本の皇太子妃の悲話」。雅子さまを「キャリアを犠牲にした悲劇の女性」として描く。著者のベン・ヒルズ氏の経歴は欄外を参照してもらおうとして、さっそく本の中身を紹介しよう。

本では皇室内部の人間関係、これまで雅子さまについて語られてきたことを、それこそ噂の類まで取り上げ、検証を試みている。その結果、かなり衝撃的な内容となっているが、ショックなのは雅子さまを気遣う皇太子さまが、自身の皇籍離脱まで考えていた——ということなくだりだろう。

雅子さまと皇太子殿下が考えていた

皇籍離脱の真相



今年9月10日にはご家族で大相撲秋場所の初日を観戦された

で」という条件で、本誌のインタビューに応じた。

著書に「皇太子が自分の退位の可能性についても考えていたようだ」とあるが根拠は何か。

「雅子さまと皇太子に会った友人の方から考えるに、皇太子が皇位継承権を放棄する可能性について議論したことは確かです」

具体的には、いつ、どのような内容の話があったのか。「これは秘密の情報源であるため、詳しくはお話しすることができませんが、時期は皇太子の「人格否定発言」(2004年5月。皇太子さまが「雅子のキャリアや人格を否定するような動きがあった」とも事実です」と発言)があった後のことです」

皇太子さまは、具体的にどのような形での放棄を考慮していたのか。

考え直したのは愛子さまの存在

「私の推論ですが、それは皇室典範第3条により可能です」
皇室典範第3条はこう記す。

「皇嗣に、精神若しくは身体の不治の重患があり、又は重大な事故があるときは、皇室会議の議により、前条に定める順序に従って、皇位継承の順序を変えることができる」

ため本分を忠実に果たしてこられた。したがって、たとえ妻の健康を犠牲にしても、その宿命を放棄することとはできないだろうということ。二つ目は、退位は雅子さまの家族にとって大変な不面目となります。そして三つ目は二人が話し合いをした当時、愛子さまの皇位継承を認めるような法整備について真剣な議論が交わされていた。もし雅子さまと皇太子が東宮を去ることになっても、宮内庁が愛子さまの同行を許すはずがないのです」

そして皇太子さまが一般の宮様になると、次は皇室典範の第11条によって「皇籍離脱」ができるのではな

いか、という可能性が検討されたという。ただし、(いったん皇籍離脱してしま

まうと、東宮を離れ、東京の片隅かポストン、オック



ベン・ヒルズ=1992年から95年の3年間、オーストラリアの有力紙シドニー・モーニング・ヘラルド紙などで東京特派員を務めた。オーストラリアのピューリッツァー賞と称されるウォークリー賞を受賞。戦後日本政治や人々に関する著書『日本一戦列の人々』がある

集部注・正確には皇位継承権の放棄)が行われていることは十分、認識しているはずだ(著書から引用。以下同じ)

本当年的か。オーストラリア在住のヒルズ氏は「間違いないようにメール

派な方で、良き天皇になる

また、東宮を離れ、東京

結核して3年経っても出産していないと報道し始めた

その年の皇太子の誕生日の記者会見の際、「コウノトリは静かで平安な場所を必要としている」と、メディアに報道の鎮静化を呼びかけたが、報道は増えていく一方だった

〔雅子さまはご結婚後、毎月、天皇、皇后両陛下に呼び出された。天皇陛下は丁寧で形式にのっとった言葉を使い、月経があったかどうかを尋ねられ、雅子さまは今月もまた懐妊できなかったと告白しなければならなかった〕

そして――1997年5月、ヒルズ氏によれば、雅子さまはバリでの公務を突然、キャンセルされる。それから2年間、海外での公務がなかったが、その背景には宮内庁が「雅子さまが宮内庁に「協力」するまで海外に出さなかつた」からだといふ。ヒルズ氏は主張する。宮内庁が求めた「協力」――それが不妊治療だった。

園遊会欠席でわかつた 雅子さま復帰の高いハードル

東京・元赤坂の赤坂御苑で11月9日に開かれる秋の園遊会に、皇太子妃雅子さまは欠席し、秋篠宮妃紀子さまは出席する。宮内庁は2日、こう発表した。

なかでも注目されたのは雅子さまの欠席だった。2003年秋の園遊会を最後に3年間欠席がなく、本格公務復帰への第一歩と見られてきたからだ。だが、「多くの人と個別に会う行事はまだ負担が大きい」(宮内庁東宮職)との理由で見送りに。この「負担」とは実際、どんなものなのか。

園遊会は、天皇、皇后両陛下が政府の要人や外国の外交官、各界の功労者ら約2千人を招き、春と秋の年2回開かれる。人々が見守るなか、皇族がたは両陛下を先頭に1時間ほどかけて会場を回り、「お言葉」をかけていく。あらかじめ記者会は声をかけてほしい5、6人のリストを宮内庁に挙げており、彼らとのやりと

東宮職の御用掛就任を発表した。

その後、雅子さまの懐妊が明らかになり、2001年12月1日、愛子さまが誕生している。ヒルズ氏はこう記している。

〔2001年3月、すでに雅子さまは不妊治療を受けていたが、堤の任命が公式に発表された。後に宮内庁は遠まわしに「ホルモン治療」に言及したが、「世界初の試験管ベビー」天皇となる皇子誕生の準備がなされた」という報道は全くなかった。〔略〕現在でも雅子さまは日本で初めて、おそらく世界でも最初に体外受精による不妊治療を受けた妃殿下であろうことを口にすると、周囲の反応は当惑するか、怒って否定するかに限られる。しかし、なぜ、ほかでもない体外受精の權威である堤が指名されたのか〕

愛子さまの誕生後、雅子さまは皇太子さまとともに2002年末、オーストラリアとニュージーランドを訪問された。海外での公務は3年ぶりのことだった。〔2003年2月〕外交官である雅子さまの父が、国際司法裁判所の判事に任命されたため家族ともオランダに赴任し、仲の良い友達も仕事により海外へ。唯一、定期的に東京を訪れるのは、東京・青山に住む妹の節子さんだけになり、ますます孤立が深まり、追いつめられていった。



の公式ユニホームを着た愛子さまの写真を見せ、談笑した。その半面、相手によつては何を話したらしいのかと、戸惑いの表情をみせるときもあるという。さらに、雅子さまは「見つめられるのが負担」(宮内庁東宮職)。大勢の視線にさらされる園遊会は、「最もハ

リアとニュージーランドを訪問された。海外での公務は3年ぶりのことだった。〔2003年2月〕外交官である雅子さまの父が、国際司法裁判所の判事に任命されたため家族ともオランダに赴任し、仲の良い友達も仕事により海外へ。唯一、定期的に東京を訪れるのは、東京・青山に住む妹の節子さんだけになり、ますます孤立が深まり、追いつめられていった。

第2子の出産は まずありえない

雅子さまは唯一、堤教授を信頼していたと言われている。その堤氏が去り、いまのような状況の中で、ヒルズ氏は雅子さまが第2子を出産する可能性はないだろ

「お召し物」の負担も大きい。文化女子大学客員教授の渡辺みどりさんは、「女さん(女性皇族)は服装が大変ですね」との言葉を、ある男性皇族から聞いたことがある。和装にするか洋装にするかなど皇后美智子さまの決定を受け、女官を通じて連絡を取り合い、「ご身位」や年齢にふさわしい色や柄を選ぶのだ。ときには、そろって菊の紋様の着物や帯を着用するといった「連係プレー」も見せる。

「雅子さまはとくに、お着物を「負担」と感じておられるようです。黒田清子さんの披露宴にも、ただ一人、洋装で出席なさいましたし」(渡辺さん) かつや紀子さまは帝王切開直後こそ6カ月程度の安静を勧める主治医の言葉もあったが、9週間で園遊会出席が可能になった。心の傷は、体の傷より治りにくいものかもしれない。 本誌・高橋淳子

うとみる。本ではこう記す。〔神の手〕は去り、結局、誰か新しい医師の下で、再び不妊治療する気は雅子さまにはなく、2回目の不妊治療が行われることはなかった。

そして2004年5月、皇太子さまの「人格否定発言」があったわけだが、著書ではこう記されている。〔皇太子の人格否定発言の2週間後、湯浅利夫宮内庁長官が、雅子さまに「女の子では不十分だから男の子をつくるように」と言っていた〕

「不妊治療は精神的にも体力的にも負担が大きい。不安定になったり怒りやすくなったりすることが、雅子さまの場合もあった」 とヒルズ氏は指摘。ここで天皇、皇后両陛下と雅子さまの関係にも変化が見られ、雅子さまは公務を休みがちになり、家族での夕食会などもなくなってしまうとヒルズ氏は言うのだ。そして人格否定発言の2ヵ月後、宮内庁は雅子さまが

「大野教授は、認知療法という手法を用いるうつ病治療の専門家、適応障害の専門家ではありません」 加えて、母国のオーストラリア、米国、日本の著名な精神科医に意見を求めたところ、全員が「雅子さまは深刻なうつ病である」と一致したという。

雅子さまがうつ病だとし、なぜ発表をしないのか。そこには宮内庁の信じがたい体質があるという。 「宮内庁は精神疾患に対して前近代的な視点を持っていてこれを認めようとしません。治療可能な疾患ではなく、遺伝性のようなもので、皇族の遺伝子プールを「汚染」するかもしれない」と、宮内庁は考えているのです。

さらに、ヒルズ氏は、「大野教授の治療にいくらか効果があっても(いまの状態では)雅子さまが回復することはない」と指摘する。 (なぜなら、病の原因は宮内庁が雅子さまに課してい

「適応障害」であることを発表している。

秋篠宮妃紀子さまが悠仁さまを出産した今、表面上は雅子さまがお世継ぎの心配をする必要はなくなっているが、雅子さまの病気は回復していないという。なぜか? ヒルズ氏は、 「宮内庁は、「適応障害」だと言っているが、本当は彼女は重度のうつ病です」と語る。本にはこうある。

〔適応障害については精神疾患の世界的バイブルである、米国精神医学会の「精神疾患の診断・統計マニュアル」(DSM-IV)に記述がある。この障害は一時的なもので半年以上続くことは決してないと言明されている。雅子さまはすでに3年間も「病気がわけだから、適応障害の可能性はないだろう」

なぜうつ病だと言えるのか。ヒルズ氏は二つの根拠を挙げている。 ひとつは雅子さまの治療に慶応大学保健管理センター・大野裕教授が選ばれて

こうした状況に見切りをつけたのか、宮内庁の中では、ご夫妻のあずかり知らないところで、次のような解決策が模索されていたと指摘する。

〔宮内庁の役人たちは、もう1年以上も離婚という「解決法」を検討していた。雅子さまは皇后になるのにふさわしくないし、離婚すれば皇太子は再婚をして男子後継者をもうけることができる。さらに、女系天皇を認める法改正も避けることができると、宮内庁の代弁者たちは語った) ただし、(皇室の人々も宮内庁の役人も、この結婚は間違っていたと考えていたとしても、皇太子はまだ、病に苦しむ雅子さまを深く愛し、支えようとしている)として、宮内庁の誰も、離婚のことを二人と話し合っ

2003年10月、雅子さま直近最後の出席となった園遊会(代表撮影)



2001年12月1日、愛子さまのご誕生にあたり
会見する小和田夫妻

てはいいないという。

一方、本の中でヒルズ氏は雅子さまの半生をたどりながら、結婚前のロマンズについても検証しているが、こうした関係を一切否定している。

「雅子さまと先輩の外務官僚（本の中では実名）の関係について、以前の同僚によれば、彼らは先輩後輩の関係であり、親しくしていたけれども、英国紙に報じられたような性的な関係ではなかった」

インタビューではこう語

った。

「これまでメディアでは雅子さまの恋愛スキヤンダルに関する2件の報道がありました。私が、私はどちらもロマンズというより友情のストーリーであると思っています」

興味深いのは国民からの祝福ムードに迎えられて結婚したご夫妻だったが、雅子さまの関係者たちがこの結婚に危惧を覚えていたことだろう。本では雅子さまの友人がみな、結婚に否定的であったこと、友人の一人（実名で登場）はショックのあまり、披露宴にも出席しなかったと伝えている。

早ければ来年の1月に邦訳版が

改めて、ヒルズ氏に本書の執筆の動機を語ってもらった。

「雅子さまが、高度な教育を受け豊かな才能に恵まれた女性であり、国際的な大使として国に大きな貢献をしていたかもしれないとい

う点で、私は彼女に惹かれました。古代から続く閉鎖的な家に嫁ぐことはしたくなかったけれども、家族、そして国に対する義務感もあり、説得に応じたのです」

自分を犠牲にして。宮内庁が彼女を苦しめる道を選び精神疾患に追いやったのは非常に恥すべきことです」

いずれにせよ、宮内庁だけの問題ではない。

「日本のメディアにはタブーが多すぎる。社会のあらゆる出来事に関して率直な議論が妨げられているようです。例えば、人工授精であるのが自然であろうが赤ちゃんの誕生は祝福すべきものというのが世界の認識です。体外受精は忌避すべきものだといふばかけた迷信が存在するのは日本だけ。私の著書が体外受精議論の火付け役になればいいと思う」

専門家たちは、この本をどう見るのか。世界の王室の王位継承問題を記した「お世継ぎ」の著者で評論

家の八幡和郎氏は言う。

「外国の王室の例をみても『国の象徴である』両陛下への敬意はそれなりに払われるべきですが、ほかの皇室関係者については、名誉毀損に当たらない範囲でなら厳しい批判があってもおかしくない。

とくに皇太子ご夫妻にはむしろ将来の両陛下としてふさわしいかどうかのチェックがされるべきともいえません」

本の中で実名でコメントしている皇室ジャーナリストは、こう困惑している。

「確かに1年ほど前に取材を受けましたが、日本の皇室事情を知りたいからと言われたので取材を受けただけ。そんな内容とは知りませんでした……」

批判の対象となっている宮内庁からは、「その本をまだ読んでいないし、(今回の取材の)回答期限までに間に合わない」として、回答

—あなたの“元気”応援します—

“健康で長生き”
それがワクナガの
願いです。



WAKUNAGA

滋養強壮・虚弱体質 熟成ニク抽出液配合

キョーロピン

0120-39-0971

http://www.wakunaga.co.jp/

湯水製薬株式会社

は得られなかった。

日本人にとっては衝撃的な内容も少なくないが、いずれも友人などの証言を基にしているため、どこまで裏付けがあるのか疑問に思える部分もある。

細かい事実関係での誤認も散見でき、その点での検証は必要だ。ただ、実に多くの関係者が実名でインタビューに応じ、いとも簡単にヒルズ氏の言う「タブー」を飛び越えてしまった感じはある。

日本では、早ければ来年1月に講談社から邦訳版が出版される。

本誌・中釜由起子